

平成 30 年秋における外来魚当歳魚生息状況調査結果

田口貴史・三枝 仁・酒井明久

1. 目的

平成 30 年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル、以下バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

平成 30 年 9 月 19 日から 11 月 5 日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深 7m 以浅）の 116 定点（北湖 75 定点、南湖 41 定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長 4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は 0.27m/秒を基準とし、北湖では 5 分間、南湖では 3 分間曳網した。採捕魚の測定結果から、バスでは北湖、南湖別にそれぞれ標準体長 150mm、120 mm 未満を、ギルでは標準体長 50mm 未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積 1ha あたりの採捕尾数）を算出して、平成 19 年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では 98.2 尾/ha（前年比 19.9%）、南湖では 236.9 尾/ha（前年比 35.1%）で南北ともに前年に比べて減少した（図 1）。ギル当歳魚の生息密度についても、北湖で 58.3 尾/ha（前年比 2.6%）、南湖で 419.3 尾/ha（前年比 33.9%）と減少し、平成 19 年以降で最低となった（図 2）。

平成 30 年 9 月には大型の台風 21 号が上陸し、琵琶湖内の水位が大きく変動するなどして湖底環境の強い攪乱や水草帯の消失が生じた。ブルーギル生息量の変動には水草の現存量の変化が影響していることが示唆されていることから¹⁾、こうした急激な環境変化や水草帯の消失が、バス、ギル当歳魚を減耗させた可能性が考えられる。

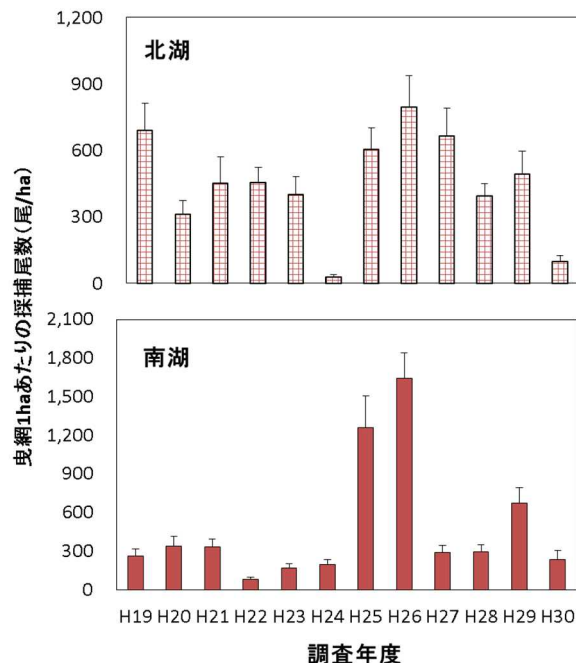


図 1 曳網 1ha あたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

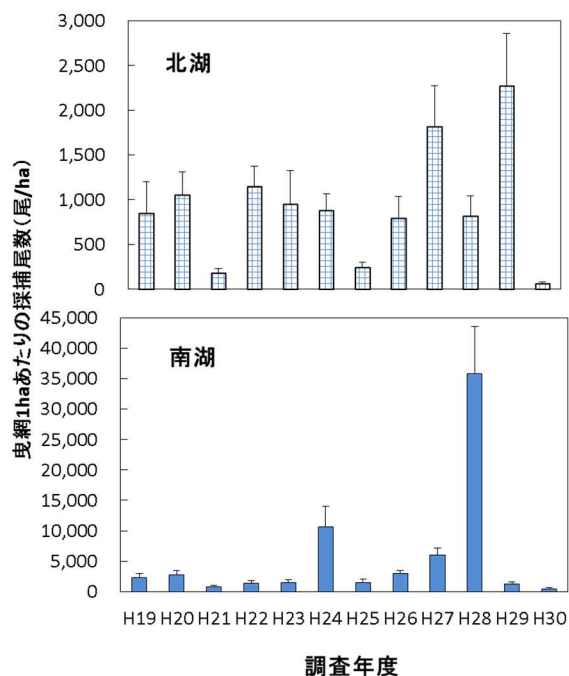


図 2 曳網 1ha あたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

1) 本報告の「琵琶湖南湖におけるブルーギル生息量の変動要因の検討」を参照。